

## ものの数え方

はじめに

日本の①数詞は②和語と③漢語が混淆している。そして現在、数を数える場合には和語数詞よりも漢語数詞が優勢である。しかし「四」や「七」は和語数詞で数えられることが多い。また、助数詞にも数詞同様、和語と漢語が混淆しており、元来和語数詞を用いて数えられていたものが、現在では漢語数詞を用いて数えられたりしている。本稿では、『日本大文典』や『数え方の辞典』、『数え方でみがく日本語』、そして『日本国語大辞典』等の本と、安田尚道『シ(四)からヨンへー4を表す言方の変遷』を基盤に、なぜ「四」と「七」は和語数詞を用いられることが多いのかを「四」を中心に追求し、またそれを交え、和語数詞の助数詞がいつから漢語数詞の助数詞が用いられたのかを探索していきたい。

## 一 一、日本の数詞

日本の数詞には三種の系列がある。一つ目が和語数詞と呼ばれるもので、「一(ひ)、二(ふ)、三(み)、四(よ)、五(いつ)、六(む)、七(な)、八(や)、九(こ)、十(とお)…」と数える。これは日本古来の数である。二つ目は、中国から入ってきた数が漢語数詞と呼ばれるものである。これは「一(いち)、二(に)、三(さん)、四(し)、五(ご)、六(ろく)、七(しち)、八(はち)、九(きゅう)、十(じゅう)…」と数える。そして、最後に英語数詞と呼ばれるものである。これは「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイト、ナイン、

テン…」と数える。ここでは和語数詞と漢語数詞を取り上げる。

## 一 二、数詞と助数詞の関係

日本語で数を数える時には、「数詞+助数詞」という形で表す。主に、「和語数詞+和語助数詞」「漢語数詞+漢語助数詞」で表す。その他、「漢語数詞+外来語助数詞」で表される場合もある。

田野村忠温(1990/2003)は、助数詞の大半は漢語数詞に付くとしている。

多くの助数詞は、漢語数詞に付き、和語の数詞には付かない。例えば、「枚」の場合、「いちまい、にまい、さんまい、し」とは言うが、「ひとまい、ふたまい、みまい、し」とは言わない。

[p.194]

「枚」だけではなく、「頭」や「匹」もそうである。「いっとう、にとう、さんとう…」と数えるが、「ひととう、ふたとう、みとう…」とは数えない。「匹」についても同様であり、「ひとひき、ふたひき、みひき…」とは言うことはない。

飯田朝子(2005)も漢語助数詞が広く使用されているとしている。

数詞の読み方で迷ってしまった時、覚えておく便利なのは、現在一番広く使われているのは漢語数詞だということです。和語数詞や英語数詞も、数え方に応じて登場し、「一人、二人」「一箱、二箱」「ワンステージ、ツーステージ」のように、特に数詞の「一」と「二」は敏感に相手を選んでしまいます。しかし、これが「三」以上にな

ると教詞は漢語数詞の読み方へと変化し「三人」ではなく、「三人」、  
「三箱」ではなく、「三箱」、「スリーシテージ」よりは、「三ステージ」  
と言うようになりませう。

[p.21]

#### 一・三、「四条」と「四条」

京都の道路は碁盤の目状になっており、一条から順に九条まで存在している。札幌は京都を模範とし、同じく碁盤の目状の作りをしており、同じように「〃条」が存在している。京都は「一条（いちじょう）、二条（にじょう）、三条（さんじょう）、四条（しじょう）、五条（ごじょう）、六条（ろくじょう）、七条（しちじょう）、八条（はちじょう）、九条（くじょう）、十条（じゅうじょう）」と読んでいく。それに対し札幌では「一条（いちじょう）、二条（にじょう）、三条（さんじょう）、四条（よじょう）、五条（ごじょう）、六条（ろくじょう）、七条（ななじょう）、八条（はちじょう）、九条（くじょう）、十条（じゅうじょう）」と読む。京都は「四条（しじょう）、七条（しちじょう）」と漢語読みなのに対し、札幌では「四条（よじょう）、七条（ななじょう）」と和語読みである。

#### 一・四、「四（シ）」と「七（シチ）」

なぜ「四」は「シ」ではなく「ヨ・ヨン」なのか。また「七」は「シチ」ではなく「ナナ」なのか。

「四」は「四の字」と言われ、縁起が悪いということから忌み嫌われている。

それ故、病院やマンションなどでは「四」の数字が使われていない場合が多い。以前私が住んでいたアパートにも「四」がなく、三〇三号室の次は三〇五号室になっていた。エレベーターにも、四階が存在しない場合があるようである。また、自動車のナンバープレートを見てみると、「し」という平仮名が使用されていない。これも同じく、縁起が悪い言葉を連想させるからだという。この場合は、「四」ではなく「死」を嫌っていることであるが、縁起が悪いという意味では「四の字」嫌いに関係しているであろう。

「四」は、数字の「四」自体を嫌う場合もあるが、漢語数詞である「四」

を嫌っていることが多いようである。

安田尚道(2002)は四を忌むことに関して、『万葉集』第十六卷三八二七番歌「詠雙六頭詞」の「四さへ」は、本来忌むべき四という数さへの意と考えられるとし、奈良時代に既にあったのではないかとしている。鈴木博『国語学叢考』には、佐竹昭広・三田純一編『上方落語』の下巻（一二二頁）には、「死」に通じる「し」の字のタブーの古さが、鎌倉時代の『沙石集』に溯ることが示されているとしている。また、佐竹氏は『沙石集』の文章とほぼ等しいものが『蓮如上人遺文』の「世間に人の物忌する事」（五一八頁）の条に見えることを教示しているとしている。『国語学叢考』から引用する。

先程二死トイフコト、オソロシクイマハシキ故ニ、文字ノ音ノカヨ  
ヘルバカリニテ、四アル物ライミテ、酒ヲノムモ三度五度ノミ、ヨ  
ロヅノ物ノ数モ、四ヲイマハシク思ヒナレタリ。

【上方落語】p.14

死といふ事ををそろしくいまはしきゆえに、文字のこえのかよへるばかりにて、四ある物をいみて、酒をのむにも三度五度のみ、もろ／＼の物のかずも四（ママ）をいまはしく思ひなしたり。それほどに四の文字の音だにもいまはしき心に、正月はことにをそるべき死せる魚鳥を家のうちにとりいれて、きりもりいりやくは、ただ人畜ことなれども、死のかたちおなじけば、葬送のかたちなるべし…

【蓮如上人遺文】p.518

また、『日本大文典』にも「四」と「死」の関係について詳しく記述されている。

四つを意味するㄨ(四)は或語とは一緒に使はれない。それは死とか死ぬるとかを意味するㄨ(死)の語と同音異義であって、異教徒は甚だしく嫌ひ、かかる語に接続した四つの意のㄨ(四)はひびきがよくないからである。従つて、その代りに、よみ、のよ(よ)を使ふ。こゑ、でありながら主として使はれない語は次にあげるものであつて、その他にも実例が教へてくれるものがある。

## もの数え方

Do (度) は Xido (四度) と言はなす。Yodo (やど) とす。Rui (類) は Kirui (四類) と言はなす。Yorui (やるゐ) とす。Nichi (日) は Ximichi (四日) とす。Yocca (よっか) とす。Ri (里) は Xiri (四里) 一尻の意味にもなる。Yori (より) とす。Sô (艘) は Xisô (四艘) とす。Yosô (よそう) とす。Nin (人) は Xinin (四人) 一死人を意味する。Yonen (よねん) とす。Nen (年) は Xinen (四年) とす。Yonen (よねん) とす。〔土井忠生 (1955) 『日本大文典』 p.766〕

しかしながら、ロドリゲス『日本大文典』には「四」を「し」と読む例が幾つか存在している。どのような単語があるのか書き出してみる。

四郎 (Xiro) ・ 四郎右衛門 (Xiryaeomon) のような名詞の他に、四季 (Xiqui) ・ 四時 (Xixi) ・ 四節 (Xixet) ・ 四海 (Xical) ・ 四書 (Xixo) ・ 四大 (Xidal) ・ 四譜 (Xitai) ・ 四生 (Xixo) ・ 四纏 (Xinun) ・ 四能 (Xino) ・ 四曼荼羅 (Ximandara) ・ 四夷 (Xiy)

固有名詞などもあるが、これを見ると、「し」と読む単語も多くあり、必ずしも「四」を「し」と読まないという事ではないようである。

「七」というと「四」のように忌み嫌われていたからという理由ではないと考える。これは、よく「一」と音が似ており、間違えるからと言われている。京都では「七条」は「シチジョウ」であるが、バスのアナウンスで「ナナジョウ」と言っていたのを聞いた事があり、京都市交通局のホームページには、「七条河原町」は「ななじょうかわらまち」と表記されている。これは「一条」「四条」と音が似ているため間違わないようにしていると聞いたことがある。このように、他の数字と間違わないように「シチ」ではなく「ナナ」を使用しているのではないだろうか。

## 一・一五、「四人」の読み方

人を数える時、普通は「一人(ひとり)、二人(ふたり)、三人(さん

にん)、四人(よにん)、五人(ごにん)、六人(ろくにん)、七人(しちにん)、八人(はちにん)、九人(くにん)、十人(じゅうにん) …」と、「一人」と「二人」は「一人(いちにん)、二人(ににん)」ではなく、「一人(ひとり)、二人(ふたり)」と和語数詞で数える。また、「四人」も「四人(しにん)」ではなく「四人(よにん)」と数え、「七人(しちにん)」も、「一人(ひとり)、二人(ふたり)」と同様「七人(ななにん)」と数えられることがある。

「四人」は「死人」に通じるとして嫌われていたようである。したがって、和語である「よたり」や「よつたり」が主に使われ、後に⑤「よにん」という読み方が出てきたようである。

『日本国語大辞典』を用い、「四人」の読み方の変遷を時代順に見ていく。

- ① 「汝(いまし) 四(ヨタリ) の卿(まひちきみ) を以て、拜(こよさ) して大将(おほいくさのみ) と為」『日本書紀』「雄略九月三月」(前田本訓) (720)
- ② 「刹帝利等の四(ヨタリ) の大種姓、无量の人衆、其の身を沐浴して淨衣服を着て」『地藏十輪經元慶七年点二』(883)
- ③ 「兄弟四(シ) 人流罪せられ給しか」『高野本平家物語』(130前)
- ④ 「正夫人の子の、同母兄弟はよつたりであるが、長子から次第に立たれども」『史記抄』(147) 一〇・「呉太伯世家」
- ⑤ 「此中将殿は、御子四人(ヨニン) 持給ふ」『御伽草子』「鉢かづき(室町末)」
- ⑥ 「Yotari (ヨッターリ) 〈訳〉四人」『日葡辞書』(160304)
- ⑦ 「よつたりの人々は、たびくたびれにくたびれて、ぜんごもしらずふしておはします」『説経節』「さんせう太夫」(与七郎正本(160頃))
- ⑧ 「四人(よつたり) で土手をくるのは鞠くづれ」『雑俳』「柳多留」一七 (1782)
- ⑨ 「四人一座となりて盃を廻らし」『雪中梅』「末広鉄腸」下・四 (1886)

①は「四」を「ヨタリ」と読んでおり、読み方として。ここでは「ヨタリ」が一番古い。奈良時代や平安時代は「ヨタリ」が主流だと言える。②では「シニン」と読んでおり、室町時代になり「シニン」という読み方が出てきている。③では「ヨツタリ」であり、室町時代以降、明治時代までは「ヨツタリ」が主流だと言える。そして④では「ヨニン」であり、現在主流になっている読み方である。この読み方は既に室町末には使用されていたようである。しかし、室町時代の他文献には「ヨニン」という文字は見かけず、『日本大文典』にも「ヨニン」ではなく「ヨツタリ」と記載されていることから、「ヨニン」という読み方は極最近のものだと考えられる。しかし、京都の「片言」を集めた『かたこと』には、「ヨニン」という読み方が記載されており、江戸時代には「ヨニン」という読み方が定着していたといえるだろう。

「一人二人三人四人（ヨニン）といふべきをさんになよつたりといふことは少しもくるしからず。」

〔安原貞室（1650）『かたこと』巻三・「人倫并人名之部」〕

「四人」の読み方を調べてみると、やはり「シニン」と読んでいる文献は少なく、避けられていたと考えられる。安田尚道（2002）によると、「シニン」は『平家物語』や平曲の写本に見えるとしている。『日本国語大辞典』に記載されていた『高野本平家物語』の他に『青州文庫本平家正節』（天保六1835年識語）や『前田流譜本平家物語』（早稲田大学博物館蔵、享和三1863年）などにも見受けられるようである。また、これについて安田氏は以下の様に言う。

高野本は室町時代、青州文庫本・演劇博物館本はいずれも江戸時代の写本であるが、江戸時代には一般にはシニンという形は全く使われていなかったようだから、シニンは『平家物語』の語りの伝統の中に残ったものであると思う。

[p.130]

このように、「シニン」と読むことはとても珍しかったことがわかる。

## 一六、「四」の対応

今まで、「四」の読み方について論述してきた。そのなかで「四」の「シ」という読み方が「死」と音が似ているということで「四の字」と言われ、避けられるようになったと書いた。しかし、文献などで「四」を使用されていることが多い。ではどのように対応したのか、これまでのことを交えて論述していく。『日本国語大辞典』には「四」の読み方について以下のような読み方が見受けられた。

（一）し【四・肆】『名』①数の名。三の次の数。よ。よつつ。よつ。よん。

②四番組。

（二）よ【四】『名』①四つ。和語の名詞・助数詞の前に直接付けて

用いる。「四切れ」「四度（よたび）」「四年（よとせ）」など。②四つ。漢語の名詞・助数詞の前に直接付けて用いる。漢語の「四（し）」が「死」に通じるとして嫌われた結果うまれた用法。「四人」「四年」「四番バッター」「柔道四段」③物の数を、声に出して順に唱えながら数えるときの四。実際に唱えるときには、普通は「ひーふーみーよー」のように長く発音する。

（三）よん【四】『名』（よつ（四）の語幹「よ」が漢語数詞「さん

（三）の類推で変化したもの）数の名。一の四倍。あとに和語助数詞が付く「よ」とは異なり、あとには主に漢語数詞や漢語助数詞が付く。「一足すよんは五」「よんじゅう（四十）」「よんひゃく（四百）」「よんかい（四回）」「よんさつ（四冊）」など。

このように「四」は「シ」の他に「ヨ」、「ヨン」と読まれている。使用された年代としては「ヨ」の方が早く、広く使用されていたようである。『更級日記』には漢語数詞「シ」を「ヨ」と言い換えていることが「四方」から見取れる。

「えもいはすおほきなるいしのよほうなる中にあなのあきたる中よ

りいつる水のきよくつめたきことかきりなし」

〔『更級日記』(1060)〕

この『更級日記』以前では漢語「シ」が和語「ヨ」に置き換えられ使用された例がない。このことから、これが一番古いものといえるだろう。

漢字の「四」を避けて、ひらがなや他の漢字を使用している場合もある。それは『群書類従』の『祇園会御見物御成記』の献立に見受けられる。本来「二、三、四、五」と書かれるべきのだが、ここでは「二、三、よ、五」と、ひらがなを使用している。また「よこむ。五献、六こん」と記されているものもあった。鈴木博(1998)は永祿四年(一五六二)の『三好筑前主義朝朝臣亭江御成記』にも同様の記載が見られるとしている。また『文祿四年(一五九五)御成記』には、「御与、御五」と記し、「三ノ膳、与ノ膳」、「三ノ膳、与ノ膳、五ノ膳」と記しているとしている。「四」を「与」に置き換えたわかりやすい例としては、お正月に使用する重箱がある。重箱はおせち料理を詰める時に使用される。重箱は本来四段重ねであり、上から順に「一の重、二の重、三の重、与の重」である。おせち料理は縁起の良いものであるため、「四」と「死」の結びつきに関しては敏感であったのではないだろうか。

また、「四」を使用せず、数を足したり、分割したりするなどしていた例もあるようである。『国語学叢考』を引用する。

中村氏はこの『定嗣卿記』の用例に対して、「十四といわず、二七」というのは「として先掲の「謂二七者……加之」を引いておられるが、<sup>(6)</sup>(A二八頁)、「謂二七者……加之」の意味は、「十四」の「四」文字を避けるために、九九による「二七」という表現によったというのではなく、「二七、十四」の中の「四」という数を忌んで、一丸を加え合計十五にしたことであろう。つまり「憚四字」と記してはいるが、「四」(この場合「十四」という(字ではなく)数を憚ったのである。

〔鈴木博(1998)『国語学叢考』p.11-12〕

太田氏の(7) B(四七頁)は、「日本歴史」昭和四十九年一月号に

坂本太郎博士が「四の数を忌むこと」と題して書かれた中で、江戸時代に存した「四」を忌む俗信がどこまで溯られるものであるうか(八三頁)との疑いを発せられたことに対して、平安時代の史料から「四」を忌む例を四つ示されたもので、氏の解説を参考にして簡記すれば、左のとおりである。

- 1、『小右記』天元五年(九八二)三月十一の条に、簡に着ける者が四人あったが、「頗有二詞忌一」というわけで、いま一人加えて五人とした。
- 2、『為房卿記』寛治元年(一〇八七)七月二十五日の条に、読経の実数が二千四百巻と書いたのは「忌二四字一歎」と言う。
- 3、『玉葉』治承三年(一一七九)十月三日の条に、拝賀する先が四个所になるのは「可レ有レ」、したがって三个所と一个所との二に分けようとした。
- 4、藤原孝範作の『柱史抄』下、臨時、帝王部、大神宝事に、宣命の草が四通になるときは「有二其一」、よって伊勢神宮の一通を、内宮分と外宮分とを別にして、合計で五通とする(ということらしい)。

〔鈴木博(1998)『国語学叢考』p.12〕

一七、「ヨ」と「ヨン」

なぜ「四」は「ヨ」と「ヨン」と読むのか。

安田尚道(2002)は『NHK日本語アクセント辞典新版』の付録である「数詞+助数詞のアクセント一覧表」を用い、「ヨ」と「ヨン」の使い分けについて論じている。

この一覧表の二六九の助数詞に付く4の語形は、次のような六タイプに分けられる。A「ヨンのみ」、B「ヨン∨ヨ」(ヨンが主でヨが従)、C「ヨのみ」、D「ヨ∨ヨン」(ヨが主でヨンが従)、E「シのみ」、F「その他」(《内》内に示された古い言い方は取り上げない)。A～Fそれぞれのタイプについての助数詞の語種別の数は以下の通

りである。

	和語	漢語	外来語	合計
A ヨンのみ	五	一五五	五二	二二二
B ヨン∨ヨ	六	一四	〇	二〇
C ヨのみ	七	一二	〇	一九
D ヨ∨ヨン	八	六	〇	一四
E シのみ	〇	二	〇	二
F その他	二	〇	〇	二

これらのうちの少数例は以下の助数詞である。

- A ヨンのみ〔和語〕型・組・(学級)・試合・場所・割  
 B ヨン∨ヨ〔和語〕株・切れ・組(一般)・粒・坪・棟  
 B ヨン∨ヨ〔漢語〕錠・台・第○番・段(一般)・段式・度・度目・番・番手・番目・枚・幕・名・厘  
 C ヨのみ〔和語〕重ね・口・揃い・度・月・柱・振  
 C ヨのみ〔漢語〕時・時間・時限・次元・段(段位)・人・人前・年・年生・幕目・里・椀  
 D ヨ∨ヨン〔和語〕色・桁・皿・束・玉・通り・箱・部屋  
 D ヨ∨ヨン〔漢語〕円・児・次・字・壘・鉢  
 E シのみ〔漢語〕位(旧官位)・月(暦月)  
 F その他〔和語〕ヨッカ・ヨツカメ

以上から、A「ヨン」のみ付くのは主に漢語助数詞であることがわかる(例外的に付く和語助数詞も、多くは助数詞というよりは名詞に近い)。本来「シ」と言っていたものを「ヨン」が引き継いだというところなのである。

[p.134]

『日本国語大辞典』の〔四(よん)〕にも「あとに和語助数詞が付く」よとは異なり、あとには主に漢語数詞や漢語助数詞が付く」と記載されて

いる通り、安田氏が論じたように「シ」が使用されていたものが段々と「ヨン」を使用されていったということであると考えられる。

漢字辞典では「ヨン」は和語とされている。しかし、「ヨン」は後につく和語数詞が漢語数詞に比べ極端に少なく、数を表わす場合、「和語数詞+和語助数詞」「漢語数詞+漢語助数詞」で表すことが多いことから、数詞として使用される場合、「ヨン」は和語よりも漢語に近いものだと考えられる。

## 二一、(6) 助数詞

飯田朝子(2005)によると、日本語の助数詞は約五〇〇種に及ぶと言われている。では助数詞とは具体的にはどのようなものなのか。助数詞とはものを数える時に数詞の後ろに添えられる語であり、助数詞とは文字のとおり、「数を助ける詞」である。

この章では「数え方でみがく日本語」を用いる。

基本的な助数詞は、漢字一文字で書けるものが多いです。日本語ではものの数を言う場合、数字(正しくは数詞)はそのまま出てくることができます。

[p.14]

日本語でもものを数える場合、適切な数え方(助数詞)を使うことで数えるものがどんな状態にあるかを示すことができます。

[p.23]

数え方を注意深く見ていくと、日本語で話し手や書き手が数える対象をどのように捉えているのか、そしてその数えられている対象がどのような状態なのかが見えてきます。私は数え方の研究をしながら、日本語の助数詞には、話し手が数える対象をどのように捉えているかを映し出す重要な役割があるとつねづね感じています。

[p.24]

漢字一字とはすなわち「本」や「個」「人」「杯」などであり、一・二で述べたように、ものを数える場合には数詞と助数詞が必要であり、「鉛筆一」とは言わず、必ず「鉛筆一本」のように助数詞「本」が付く。

また助数詞を見聞することで、見た事がないものでも、そのものごどのような形であるか、どのくらいの大きさであるかを想像することができる。

## 二二二、⑦ 単位

助数詞は、よく単位と言われることがある。一見、助数詞も数詞の後に付く言葉だから単位ではないのかと言われるが、実は助数詞と単位大きく違う点がある。単位は数値を表す際に数詞に添えられるものである。

## 二二三、助数詞と単位

「メートル」「グラム」の他に金銀の単位である、「円」や「ドル」、時間の「秒」や「分」なども単位である。この二つの大きく違う点は、他の数値に置き換えられるか否かである。

単位と助数詞が決定的に違う点は、単位が他の数値に置き換えられるのに、助数詞はそれができないことです。例えば「メートル」は「一〇〇センチメートル」、そして「一〇〇〇ミリメートル」とそれぞれ置き換えられます。その一方、助数詞は他の数値に置き換えることはできません。いくら「本」が細長いものを数える助数詞であったとしても「一本」って何メートル?」と聞くことはできませんし、「枚」が平面的なものを数える助数詞であったとしても「一枚」は何平方センチ?」と聞くのは、まったくもってナンセンスです。

[p.16]

## 三一一、刀の数え方

<sup>10</sup> 刀（ここでは日本刀とする）の助数詞は幾つか存在している。現在では特に刀を数える際に、メディア等では「本」の助数詞が多く用いられているようである。しかし、美術館や博物館では「口」が使われているようである。刀の数え方について『日本大文典』では「腰」を用いて「刀一腰」、太刀は「振」を用いて「太刀一振り」と数えている。

刀、(Catana) 脇差 (vaguizaxi) は Coci (腰) と数へること。  
刀、(Catana) 脇差 (vaguizaxi) は Icucoxi? (幾腰) と問ひ、その答は Fiticoxi (一腰) Futacoxi (二腰) とさす。

その漢字は人の腰を意味し、さういふ言ひ方をするのは刀を腰につけるからである。そのの、ユウは Yō (ユウ) である。従つて Tachi ichiyō (太刀一腰) とも言ふ。

その漢字は人の腰を意味し、さういふ言ひ方をするのは刀を腰につけるからである。そのの、ユウは Yō (ユウ) である。従つて Tachi ichiyō (太刀一腰) とも言ふ。

[土井忠生 (1955) 『日本大文典』 p.813]

太刀、(Tachi) は Furi (振) と数へること。

Tachi icufuri? (太刀幾振) と問へば Fufufuri (一振) Futafuri (二振) Mifuri (三振) などと答くる。

漢字の Furi (振) は振ふ意味である。例へば、Tachi fufufuri: Yma ippiqui xinjo itaxi soro. (太刀一振、馬一匹進上致し候。)

[土井忠生 (1955) 『日本大文典』 p.815]

『数え方の辞典』によると、刀の数え方は「本」「振り」「口(フリ・クチ)」「口(コウ)」「腰」「刀」「剣」「匕」の八種であるとしている。

では、実際のどの時代から使用されていたのか、『日本国語大辞典』を用い、「本」「振り」「口(ふり)」「腰」「刀」の五種を取り上げて時代順に見ていく。

⑤「甲二領、金飴の刀二口、銅の鏤鍾三口、五色の幡二竿」[『日本書紀』(720)]

⑥「吉き大刀十腰をぞ置たりける」[『今昔物語』(1120頃)]

⑥「いか物作りの太刀一腰、みづからとり出し」[『平治物語』(1220頃) 上・「信頼信西を亡ぼさるる議の事」]

⑥「ちばのすけには、むらさきいとをどしよろひの、ながふくりんたち一こし」[『承久兵乱記』(1240頃) 上・「二位殿口

「説事」]

⑦「太刀一振、しげとうの弓、野矢(のや)そへてたぶ」〔『平家物語』(130前)〕

⑧「吾以二瓶割刀一授二於汝等一、然一刀豈授二二人一」〔『本朝武芸小伝』(1716)〕

⑦「こなたにも一振拵へさせたらば能御座らう」〔『虎寛本狂言』「止動方角」(室町末・近世初)〕

⑥「帰って見れば、五つこしの大小が一(ひと)こしたらぬ」〔『咄本』「口拍子」(1773)「昼がんとつ」〕

⑦「夕立のはれゆく空のひとふりはくも切丸といふべかりける」〔『狂歌』「徳和歌後方載集」(1785) 二〕

⑧「試みに一刀を持来れよかし」〔『剣法略記』(1839) 二〕

ここでは奈良時代が一番古く、⑤の「口」である。『日本書紀』では「口」の読み方がなく、「フリ」であるのか「クチ」であるのか、「コウ」であるのか記載はない。しかし、「フリ」と読むのが一般的であろう。近世になり「ク」や「コウ」と読んでいる文献があることから、奈良時代では「フリ」と読んでいたのでないかと推測される。⑥は「腰」で⑦は「振」である。どちらも『日本大文典』に記載されており、鎌倉から室町にかけて、主に使用されていたようである。『日本大文典』では太刀は「振」と数えるとしているが、当時は「腰」にもよく使用されていたようである。⑧は「刀」で、江戸時代は「腰」と「振」の他に「刀」もよく使用されていたと考えられる。「本」については、詳しい文献を見つけることができなかったが、江戸時代に「二本差し」という言葉が存在することから江戸時代には「本」を使用していたのでないだろうか。

刀の数え方については、太刀なのか、脇差なのか、小刀なのかなど、刀の種類により助数詞が変わっているようである。しかしながら、助数詞については江戸時代から漢語数詞の助数詞が使用されているようである。

三二、魚の数え方

現在では魚は広く「匹」と数えられている。『数え方の辞典』によると、魚の数え方は「匹」「尾」「束」「本」「枚」「喉」「隻」の七種であるとしている。ここでは魚の数え方は全て漢語数詞を用いて数えるとしている。しかし『日本大文典』では、特定の魚のみであるが、「懸」という助数詞を用いて数えている。

、鑿 (Abumi) と、魚 (Vuo) は Cague (懸) と数へる。鑿、(Abumi) と、魚、(Vuo) は Lucacque? (幾懸) と問ひ、Fhocacque (一懸)・Futacacque (二懸) と答へる。

Caque (懸け) は吊す意味の Caguru (懸くる) であり、その、こ、は Quen (ケン) であつて、かつでは対とか吊り下げた一連とかの意味を示す。ここで数へられる魚はただ中位の大きさのもの、鯛 (Tai) の類だけである。例へば、Tai fhocacque (鯛一懸)・Abumi fhicacque (鑿一懸) は二匹の鑿であり、Abumitacata (鑿片々) は一つの鑿である。又は、Cata abumi (片鑿) ともいふ。

〔土井忠生 (1955) 『日本大文典』 p812〕

では、実際の時代から使用されていたのか、『日本国語大辞典』を用い、「匹」「本」

喉」「隻」「懸」の五種を取り上げて時代順に見ていく。

⑨「鮮けき鱈八隻を買ひて、小櫃に納れて帰り」〔『靈異記』(810-824) 下・六〕

⑩「一喉の魚を獄中になげ入れけるに」〔『平治物語』(1220頃か) 下・頼朝遠流に宥めらるる事〕

⑪「一懸 ひとカケ 鯛」〔『伊京集』(室町)〕

⑪「親仁には、角樽一荷に塩鯛一掛(カケ)・銀壹枚。云人の祝儀おくと見せけるに」〔『浮世草子』・『日本永代蔵』(1688)〕

⑫「一本の松魚(かつを)は食ひつくさず」〔読本『夢想兵衛胡蝶物語』(1810) 前・「貪婪国」〕

⑬「それより小太郎は、数疋の魚を釣り得て、家に持ち帰り」〔『尋常小



## 学読本』(1887)〈文部省〉五)

ここでは⑨が古く、室町時代には「隻」を使用されていたことがわかる。次に⑩の「喉」である。「喉」は鎌倉時代には使用されていたようである。⑪は「懸」であり、『日本国語大辞典』を見る限り、鯛のみ使用されていたようである。⑫は「本」⑬は「匹」であり、どちらも江戸時代に使用されていたようである。

調べてみると、魚の数え方は刀のように元々和語数詞の助数詞が使用されていたというわけではなく、「懸」は鯛に限っていたものだと考えられる。しかし、現在鯛を数える際には「懸」を使用することはなく、「枚」や「匹」を使用している。したがっていつの時代から鯛が「枚」や「匹」の助数詞が使用されているのか追求したかったが、資料を見つけることができなかった。

刀と魚を調べ、刀は江戸時代から和語数詞の助数詞が漢語数詞の助数詞に変わったことがわかったが、詳しく和語数詞の助数詞がいつから漢語数詞の助数詞が用いられたのかを追求することができず、謎なままである。

## ものの数え方

## 《注》

- (1) 体言の一つ。数によって、数量や順序を表わすもの。助数詞を伴うこともある。「一(いち)、二つ、三本、四個、五キロ」のように数や事物の数量を表わすものを基数詞、「第二、三つ目」のように事物の順序を表わすものを序数詞、順序数詞という。基数詞の中に「二倍」のように倍数を表わう倍数詞、「三分の一」のように倍数を表わす部分数詞を立てることもある。また、日本語では、基数詞には副詞的用法もある。ふつうには独立した一品詞としないで、名詞の一つとして説かれることが多い。数名詞。『日本国語大辞典』第八卷 326)
- (2) 外国語に対して、日本の国語である日本語。その語彙には、漢語

などの外来の要素も含まれる。

漢語や外来語などの外来の語に対して、日本語本来のものと考えられる語。「ひと(人)」「われ(我)」「ある(有)」「ゆたか(豊)」など。『日本国語大辞典』第十三卷 1278)

- (3) 漢民族の言語。中国の標準語。中国語。

「かんおん(漢音)」に同じ。

漢語に対して、漢音、呉音などの漢字の字音による語。また、漢字の熟語。字音語。もともと中国で用いられていたものを日本語の中に借用したもの、和語に漢字をあてて音読したものを、日本で作られたものなどがある。『日本国語大辞典』第三卷 1260)

- (4) 「四」は「死」に音が通じるところから) 忌みきらわれる「四」という数字のこと。『日本国語大辞典』第六卷 425)

- (5) 「よにん」は和語と漢語の混淆した形。

前後の三人と五人がともに漢語数詞であるのに四人だけが和語数詞なのは不揃いであるところから、「一にん」で終わる「よにん」が生まれた。

- (6) 中村義雄(1962)『王朝の風俗と文学』塙書房

- (7) 太田晶一郎(1974)『日本歴史』『歴史手帳』『四の数を思む』ことは平安時代に溯る」吉川弘文館

- (8) 数量を表わす語に添えられる接尾語。

数えられる事物の性質・形状に従って選択される。「ふたつ」「自動車三台」「たんす一棹(さお)」「一〇個」「五本」「二枚」の「つ」「台」「棹」「個」「本」「枚」など。なお、単位を示す「尺」「メートル」「円」などもこれに含める場合がある。『日本国語大辞典』第七卷 368)

- (9) 長さ、重さ、量などの数量を計算するときの基準となるもの。また、その数値。長さのメートル、重さのグラムなどの類。

(一般的に) 物事の比較計算の基となるもの。『日本国語大辞典』第八卷 1188)

- (10) ここでは直刀、太刀、打刀とする。

《参考文献》

- 安原貞室 (1650) 『かたこと』現代思潮社  
飯田朝子 (2004) 『数え方の辞典』小学館  
飯田朝子 (2005) 『数え方でみがく』筑摩書房  
鈴木博 (1998) 『国語学叢考』清文堂出版  
土井忠生 (1995) 『日本大文典』三省堂  
田野村忠温 (1990-2003) 『現代日本語の数詞と助数詞―形態の整理と実態調査』〔奈良大学《奈良大学紀要》第18号 p.194-216〕  
玉井幸助 校註 (1950) 『更級日記』朝日新聞社  
埴保己一編 (1958) 『続群書類従・補遺一 満濟准后日記 (下)』続群書類従完成会  
安田尚道 (2002) 『シ(四)からヨンへ―4を表す言い方の変遷』〔青山学院大学日本文学会《青山語文》第32号〕  
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典』第二版、小学館  
京都市交通局 <<http://www.city.kyoto.lg.jp/kotsu/>> (2014/11/27)